

コロナ禍に教育について思うこと

観一 高同窓会京阪神支部 会長 観一・10 回 片桐 陽

(昭和34年卒)



コロナ禍が猛威を振るう日々が続いていますが、いかがお過ごしでしょうか。皆様におかれましては、平素より同窓会活動に格別のご理解とご協力を頂いておりますことに感謝申し上げますとともに、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

さて、今回のコロナ禍により、我々は大災害に遭遇したような大変厳しい日常生活を強いられてきました。しかし、これは寧ろ我々に対する天の与えた警告ではないかと思うのです。古い昔から人間はより幸せになりたいと願い、知恵を競い、技術を磨いてきました。その結果、今日の便利で豊かな社会を実現しました。近代の科学技術の進歩は目覚ましく、人間が宇宙をも支配する時代が夢でなくなったといわれ、人間が万能感を謳歌するときが起こったのがコロナ禍であります。人間は、実は目にも見えない極小ウイルスにさえ翻弄される無力な存在であることが知らされたのです。

我々は幼いころから、社会に役立つ強くて立派な人間になるようにと教育を受けてきました。その目的達成を競い合い受験戦争をも経験してきました。しかし、その勝利者が果たして社会を、そして人間を幸せにする人材となっているのかと思うのです。人間とは一体何者なのか、理想の人間を目指した教育の意味は何だったのかと考えさせられ

る昨今です。

人間は人と人との間で生きる者だといわれます。どんなに優れた人も一人では生きられず、あのロビンソン・クルーソーも人との出会いの中で生きることができたのです。コロナ禍で人との触れ合いが乏しくなる状況にあつては、人間は本来あるべき姿から遠ざかっていくように思われてなりません。

コロナ禍で経済活動が低迷する現在、社会格差は次第に拡大しています。その結果、経済的理由で進学できない学生が少なくありません。在学生の中でも生活難から退学する学生が増加しているといわれています。その人たちを支援しようと育英基金を創設し運営している人がいます。先日その理事会で、コロナ禍で特別困窮している学生を追加支援しようとする提案がなされ議決されました。私もその理事の一人としてこの活動にかかわってきましたが、この基金創設者であり、多額の資金提供者でもある方の理念とその行動力には日ごろから感服させられてきました。彼は、貧しい家庭に育つたため大学入学を諦め、新聞配達をしながら家計を助け、夜学に通い弁護士となり、後に大阪弁護士会会長をされた苦労人でもあります。この方との出会いは、私どもの信用金庫が地域貢献している方を顕彰しようと「社会貢献賞」を創設していますが、この育英会を表彰したことがその始まりでした。彼との親交のなかで同じ思いを持つ人との輪が地域に次第に広がっていくことを実感し、大変うれしく感謝しています。

また、世界の建築家として活躍されている建築家安藤忠雄さんとの出会いも私の人生を大きく変えてくれました。東北震災時、多くの震災遺児孤児が発生したことが社会問題となりました。安藤さんは「この子供たちを支えよう」と「桃柿育英会」を創設し、全国の多くの人に協力を呼びかけました。私も、日ごろ親しくしている知人友人に呼びかけ協力をお願いしたところ、想像を超える多くの方からの協力が寄せられました。一人の熱い思いが社会をも動かすこと

になることを実感させられました。実は、安藤さんも家庭の事情で大学に行けず、独学で建築を学び独特の建築理念と技術を確立されました。彼の作品は寧ろ海外で高い評価を得、そして東大教授にも就任され、今や世界の安藤といわれるまでになりました。教育の大切さを痛感される彼は、現在では人生を次代を担う若者の教育に捧げているといっても過言ではないように思います。ご自身の体験から子供の頃の教育が大切だとして「子ども図書館」を地元大阪で開設し、その完成間もなく神戸で、次に東北の遠野で設計計画を具体化しています。建築資金は安藤さん個人が拠出する計画で、私欲を超えた彼の姿勢は多くの人の感銘と賛同を呼ぶこととなっています。最近では、コロナ禍で学生生活に困窮する優秀な学生を支援しようと、京大生に対する大型奨学金CFプロジェクト(Create the Future Project)を立ち上げ、多くの人に協力を呼びかけています。彼個人が10億円を拠出すると宣言したことから大きな話題となっています。私生活を犠牲にするような安藤さんの生き方を、私は「無欲の大欲」と表現していますが、安藤さんの口癖は「人間は何のために生きるのんや」です。受験戦争の勝利者ばかりではなく、高い志を抱き続ける人が社会を変える人材となることを、これまで安藤さんはじめ多くの人から学んできたように思うのです。4年前に完成した私どもの信用金庫の新店ビルは、土地の購入から設計建築に至るまで安藤さんと思いを共有しながら進めてきました。大阪の将来のこと、金融機関の役割使命を熱く語りあう中で完成した本店を持つことを誇りに感じています。

「 兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川 」と歌われるような豊かな自然の中で、人情味溢れる人々に囲まれ育った少年が大会の渦の中で生きること60余年、顧みて思うことはあの少年時代に教えられた数々のことであります。知恵も知識もましてや才もない者が80歳を過ぎた今日も、多くの人に支えられ、若き日に抱いた夢の続きを見続けられ

るのは、若き青春を母校観音寺一高で学び過ごしたことによるものと感謝しているところです。特に、心通わせる友と将来の夢を語りあったことが鮮明に思い起こされます。

人口減少、少子高齢化時代を迎え、わが国の将来は若者の成長にかかっています。そのような状況の中で学校教育の在り方が注目され、有名進学校が脚光を浴びることとなっています。母校観一においては、受験戦争の勝利者のみでなく、むしろ感性豊かな人材が育つ教育にも心がけて欲しいと期待しています。また同窓生の皆様におかれましては観一という素晴らしい学校で学んだことを誇りとし、これまでの経験を後輩たちに伝えてほしいものと願っています。

皆様の今後のご健勝とご活躍を祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。